

フリー助産婦となって

浜元勝枝

マタニティライフセンター SEIBO (沖縄県平良市)

病院を退職して、ここ2年間は私にとっても世界の政治情勢と同じく、激動の年となった。微力ながらも、地域のニーズに応えられるようにと新しい仕事に取り組んだ矢先のこと、一昨年、昨年と続いて主人の両親を亡くした。そして、義母の百日の法事を終えたその日、まだ心も沈んでいるところへ豊見山京子さんより電話が入った。「りれー随筆」の依頼で、私にとって久しぶりの朗報だった。連続の不幸から立ち直り、心機一転のため、筆不精で文才のないことを省みず引き受けてしまった。

与えられた環境で頑張るしかない

私は東京の病院で勤めたあとと家庭の事情で帰郷となり、昭和53年より11年間、県立宮古病院に勤務した。就職した当時、宮古病院に産科病棟はまだ設けておられず、外科病棟の中に未熟児室が配置されているという状態で、その1年半後に産科が開設となった。私は医師が配置されるまでは中心となって準備にあたったが、軌道に乗せるまでにだいぶ時間を要した。毎日の勤務を終えるのが精一杯であった。

宮古島で唯一の中核病院であるため、助産所や開業医からも異常なケースが転送されてくる。転送されてきた妊産婦や新生児をケアしつつ、多くのことを考えさせられた。妊婦自身の認識にも問題があると思われた。母子保健に携わる者として歯がゆい思いが重なり、私は地域に目を向けはじめるようになった。

きっかけは、年1回の厚生省から派遣される

「乳幼児一斉健診班」との出会いだった。班の産婦人科の先生の妊婦健診に同行させてもらい、多くのことを勉強させてもらった。そして、病院の中からは十分にみえてこない問題点を、積極的に地域にとけこむことで把握し、とり組む必要性を痛感したのである。

保健婦と共に

幸い県立病院と保健所は近くであり、連携のとりやすい条件を備えている。

保健所が初めて主催する母親学級や各市町村で地区担当の駐在保健婦の企画する妊婦健診に協力することから始めた。離島へも行くことになった。宮古島も沖縄本島からは離島だが、宮古島の周囲にもまたさらにいくつかの小さな島がある。私が担当させてもらったのはその中の一つ、船で20分ほどの伊良部島であったが、駐在保健婦は2つの地区に配置されているので、月に2回健診に出かけた。病院勤務に支障をきたさないように、自分の時間をやりくりしたのだが、健診日は保健婦が私の可能な日時に合わせて調整してくれた。

ここでの母親学級や妊婦健診は私の深い“学びの場”となった。1つ1つの行為やケアが意味をもって、意識づけられた。妊産婦1人1人の個性を大切に、そこから援助を展開していけるような保健指導の大切さを認識させられ責任の重味をかみしめた。

離島での妊婦健診では、今も忘れがたい症例の方がいる。妊娠24週の方だったが、腹部の



緊張感もなく、児心音が聴取できなかったのだ。病院へ緊急連絡をとった。1週間前には開業医で健診を受けており、その後、胎動が弱いかなと感じたものの、他に変化はなかったとのこと。詳しい検査が必要であることを説明し、病院へ同行した。診断は胎内死亡だった。児の皮膚の状態から数日経過していることがわかったが、母体も危いところだった。

病院勤務も嫌いではない。しかし、ボランティア精神で始めたことが、保健婦と共に歩んで10年。経験を積むにつれ地域とのかかわりが密接になり、充実感が増していった。

マタニティライフセンター開設

病院に勤務しながらいつも考えさせられたことは、忙しい中でもいかにしたら一人一人を大切にできるかということだった。しかし気持ちに余裕がないと、つつい業務に追われるのみで、問題を実感しながらもがいているということになる。そこで、もっと助産婦として量より質の自主的活動ができないかと思うようになった。そんなとき夫に「世の中にはフリーで働く人も必要。地域に還元しなさい」と助言され、フリーになることを思いきった。

施設を開設する条件には恵まれていたのだが、病院を退職するまでに2年間悩んだ。人々から理解され信頼されるには、知識や技術は当然のこととして、何より人間性が大切であること、それにはまずすべてを受け入れる構えで取り組んだ。オープンさせた施設は、助産婦とし

ての枠にとらわれず、女性と共にある存在としてなじんでもらえる空間を目標とした。そして、母子には聖母マリアが一番関わりがあると神父様に言われ、マタニティライフセンターSEIBOと名付けた。

現在、フリーとなってすべての面でよい結果が出ていると思っている。裏側は自分との戦いであるけれど。時間に追われることなく、訪れてくる方に心をこめて接することができるのが何よりである。時代は大きな変化をとげている。人間として何が大切なのか、生きている真の意味を、与えられた環境で問いつづけたい。

センターでは妊産婦の指導が主であり、出産は嘱託医の所で行なっているので、その時は私も分娩に関わっている。県立病院で働いた経験を生かし、病院と地域とのパイプ役として補い合う関係を保ちたいと思っている。

ここを、だれもが気軽にお茶を飲みながら相談できる場としたい。それが、真の地域医療を模索する私ののはじめの一步である。

* * *

今回は、聖母助産婦学院の同期生の鈴木郁美さんにバトンタッチいたします。卒業以来ずっと名古屋の聖霊病院にご勤務、産科病棟で主任としてがんばっていらっしゃいますが、現在は産休中とのことです。遠く離れてお会いする機会ありませんが、この「りれー随筆」のお陰で久しぶりに声を聞くことができました。感性豊かな鈴木さんの近況報告を楽しみにしています。そして「りれー随筆」に感謝！